

回憶漫談

道遙先生原稿



特別  
文庫14  
A157  
1

↑





Handwritten red markings on the left edge of the left page, including a vertical line and some illegible characters.

53-1702(A)





田憶漫談

道邊

No. 1

ぼりして東京へ出て来て、帝國大学の前々  
 身の湘成学校へ入学し、明治九年の九月  
 東京大学の卒業し、その日同十年の六月、海  
 女講で、あが、公報と名を署せ、世におく  
 ち、は自由た刀日談撒奇談で、その時同年の  
 十一月頃であつた。か初め  
 私の過去四十餘年間の著述生活は、自分の  
 氣持の變遷から見て、かく北四五期に區劃し

相馬屋製



得らぬ。第一期は東大在学中の十五六年から

の。本誌の所謂明治文学の胎生期に

相当する。私とては、少の慚愧なく、田

憶しかねる無自覚な、不見識な、浮き調子の

駄作時代である。書生氣遣や小説神髓は此句

に書いた。廿二年以後の氣持が一変してから

は、此第一期の作を田憶す。こゝが一種の苦痛

と云ふ。博覧強記が其十年記のその形に

相馬屋製

氣持で

忘らぬ。は、力めぬ。見え、此句

も神代種彦君が書生氣遣に種々の刊行本のあ

る。こゝと謂はれ上、内容にも新旧の差のあ

る。こゝと見えおし、いつ、何故に満ちたか

と償ひされ、私に、何の記憶もな

し。甲斐平後の笑はれた。第一期の著

譯は、自分に縁遠いものと云つてゐる。東大在学當時の私を、故右賀長雄の「アポリン

義的」と評し、同じく同窓の故橋積八策氏が「君

は始終酔つてゐる人のやうだから」と評した通り

数十十年に會つた時



の極楽とんぼであつた。

廿四五歳にたつても尚十

4

ハ歳の氣持で、浮ッ調子であつた。其頃の雑

詰では、花月新徳や東条新徳が、最も学生間に

愛慕されてゐたものが、私は寧ろ「團々珍御」を

身又珍御や、羽衣は新報の常得意で、あつた。

も餘裕がある。と、新富座へもかけ、寄席へ行く。

藝術熱は相應にあつたが、どうも主張も主義も

あつた。西洋小説に對する。好尚は、主として同窓

の親友であつた。高田半峰君の誘挽に、あつて、呼び

起された。

あつたの自序から

田舎育ちの私だが、幼少から、此政度の戯作

に親染してゐた故で、江戸藝術や江戸情緒の

面白味は、都生れの人達に劣らぬ程度に解

つてゐた。それが、寄席熱や羽衣伎に心酔せ

めた所以でもあつた。心酔し、といつても、寄

宿舎生活には窮乏な門限があつた。給費以外に

は何等の仕送りとでも圓元から、茶女寒巻生の

事として、あつた。日曜か半日を、其享樂に割けた

に過ぎない。觀劇の枠組は、大抵半拳を占めてあ

つたが、寄席へは折々一人で往つた。

六錢二重五毛

相馬屋製

No.

No.



上に茶を飲むからであつた。

もあれは、在蘭園を借りられたから。まゝとて魚  
席で、講談は白梅亭、落語は兩國の三花亭。  
けり、山朝の繪巻話、つひに三日とつ  
けて聴いたことはあつた。塩原多助も牡丹  
燈籠も、本になつてあつた。あつて其時未と知つた。

No.

私の知る範囲内

其時批判的 明治三十四年頃 東大で

西洋の純文學

故に田垣君を以て純文學好まであつたのが、  
其時分には親しくせられた。

相馬屋製

は寄着 金中の一 等時、  
すしが時にあつた。ピノとスニットの優劣論を  
は、今尚毎日に残つてゐる。私は無言の傍聴  
者たるも、聞きなれた。

折々、  
集まる所であつた。

相馬屋製



上に茶を飲むからであつた。

もあれ、在荷園を借りられたから、まゝとて  
席で、講談は白梅亭、落語は兩國の三花亭。  
かゝる、山朝の講談を、つひに三日とつ  
けて聴いたことはあつた。塩原の御も牡丹  
燈籠も、本になつてあつた。其時未と知つた。

No. \_\_\_\_\_

私の知っている範囲で

東大

西洋の純文學

No. 5

其時批判的  
明治十三年頃  
持つておられた  
存外斯かつ

たもの怒り  
最も廣く嗜讀して  
高田君の

親友の丹之馬氏であり、  
高田君自身であり、  
嚴寒期の小説部

故園を三島であつた  
小説論に華を咲か

庭の炉邊に、高田君  
小説論に華を咲か

すし、が時にあつた。  
ピットの後方論をそ

は、今尚毎日に  
私は無言の傍聴

者たるもの  
馬琴、

前にもソつと通つた、  
私は鈴をぶらりと  
腕手に

相馬屋製

は寄箱  
金中の一  
等階、  
折々、  
集まる



別紙

しい。私には可憐な少年の  
 人の敵もたぐい、喧嘩に  
 それほど私は推挙と賜  
 てる。

子供けを罵るであらう。高田君の  
 意も、もどきは一歳の兄を  
 も明らに斥けである。私は彼等  
 高田君、と呼ぶのが例であらうが、高田は  
 私には「オイ、坪向」とか「坪さん」とか呼んでる。  
 親友は「呼び附夫が當然であらうが、私はまづ高田、市  
 高田等と呼び附けにする。たゞの資格がなかりつた  
 が、もしも高田君以外は、私を「つも坪さん」と  
 呼んでる。これは「面」は子供扱ひの格呼である  
 つらう。親愛の意味を食んだ。

市馬

相馬屋製



一生涯

敵が無められとリ一は、私なき、本當の意  
 味では、只一人の師匠も無められとリつてよ  
 い。この頃の頃には、私が十人月の末ッ子であ  
 り、<sup>母</sup>母が隠居後、餘暇があつた。故で  
 が、<sup>もあつた</sup>隨分少くも、習はせよと、しつたが、  
 ちがふ者で、我儘な私は、何一つ氣を入れて學ん  
 だ事なく、番中屋で止め、少しも裨益する所がな  
 かつたし、大學に入つてからとて、通リ一遍の聽  
 講をしてゐただけで、どの教師からも見取ると  
 いふ感激を受けたりもなかつた。外国文學に對す

る好尚は、今もソつた通り、主として半澤君の誘  
 致にもといつて、<sup>種々の點で</sup>同君の感化は、在學  
 當時の私には、<sup>親身の</sup>最も大深切な又無々意、<sup>君は悦</sup>  
 も見貴のやうな態度を、<sup>君は悦</sup>當年の  
 の注意を與へてくれたから。梅君と  
 後年の二葉馬が、私に最も多く感化を與へた人  
 であつた。二葉馬は、おとで話すが、決して  
 教つたやうに口を利いたことはなかつた。極めて、<sup>注意</sup>  
 深く、<sup>深</sup>禮儀正しく、かし言やうのことは十分言つ  
 てのけるといふ態度で、<sup>弟</sup>弟やうな口吻で、弟



と文壇下の意思

積極的に

や人 生観 倫理 観

新見を傳述してつれだ。半筆書にまつては、諸君  
 されたといつてさ、二葉草によつては、暗示され  
 修養され、反省せられ、<sup>所謂</sup>いつて當惑であつた  
 り。此二葉草に、<sup>所謂</sup>胎生期に——私と神  
 益とつれだ人があつたとす、<sup>所謂</sup>卒業後に知  
 合ひにちつち總座堂村<sup>君</sup>が、君は私の作に苦し  
 て酔ふと得意の諷刺を連発して、私とつれだ其  
 横方と、其虚栄や自惚や輕薄をも、自省させそく  
 せられた。  
 つい話がそれだ。在學當時の話一戻る。

相馬屋製

No.

文壇部とソつても、當時のほ、政治、經濟が主

で、西洋文學、<sup>邦文學</sup>國文、漢文、大部分  
 完たされ、<sup>邦文學</sup>文學は、たが、亦時間位、<sup>等</sup>あつた  
 ら。英文壇のほ、ホートンと、紳士的教授の受持  
 で、<sup>キ</sup>サーヤのミルン、<sup>キ</sup>ヤミルトン、<sup>キ</sup>ヤミリス、<sup>キ</sup>ヤミリスを主とし  
 て講じた。學殖は豊から、かつたが、講義は純

相馬屋製







そのなかから、後に二葉亭に根柢を叩かれた時、

「可も無い」と答へたわけに、かたがたをうらな

薄弱な基礎の上に築かれた小説論であつた。

リットンやスミスやフィッセンを半寄りに薦められた。

山り讀みながら、おびく讀み耽るやうになつてゐる。

其時分からである。湖上の佳人を春江奇談（出版

の題名は春窓奇談と題して、同誌と共に出部

撫松式と譯したのも、九月十日に心酔して

條々の修辭で、文章軌範の下讀みをしたのも、

小説神髓の第一稿を記したのも、

相馬屋製

天慈羅屋松丹

一高田、市島、香坂、石、諸同窓と共に、

其仲間の誰れかの懐かしい懐紙がある時、

一週に二三次も出かけて、遠くみの席上で、

法論、時論、也、俗語、海也、説話の大混戦を、

前後の害を果れさせ、その時、あつちがりに借金を

控へたのも、その結果、時の總理の濱尾新に

呼び掛けられて、此の頃の、島島的生活

が、其頃、十五年の卒業試験、其頃、あるもの、

種、其、一、が、論、撒、弁、談、で、あ、つ、た、

種、其、二、が、ス、ミ、ト、の、フ、ラ、イ、ド、オ、ブ、

相馬屋製



二部分

在郷中の出版であったので

静二氏の

ランマール一匹の詩である。後者は故橋頭三氏

の名を借りて、春の情話と一題名で世に出た。

明治十五年の秋以後は、寄宿舍を出て、下宿

生活とをいめ、同時、李郷之所の進文芸社

英語教員として、費を稼ぎ、同時、鶴巻屋舎

と、得體の解らん名称の招牌を、下宿屋に掲

げて、そこでも英語の講解を教つた。

一冊には、故あつて、衆人もの若し、学生を監督す。身

とあつたので、本郷之所の塾の廣い長屋建の家に

移り、下宿を偏ひ、九人の學生をあづかり、在郷中を

生徒は四五人もあつたか？

相馬製

No.

12

いそ其人達を教へると、同時

進文芸社の生徒中の

希望者をも集めさせた。これは自分の生活を得

る為でもあつた。けれども、中もそれだけでは學費其

他が不足するので、此頃うら大分勤勞家になり、

進文芸社の時給も増し、著譯も、大学の課

目にも比較的よい所を得た。もしも二度目がか

らむもあつた。談話奇談と譯してつて、出たの約

をしたのは六月で、大卒業と同時にあつた。

卒業と同時に、半卒業の手引で早稲田又東

京専門学校の講師となり、其十二月には、小石川

三町から石川の池邊町、今の山川町毎の長を(移り)

No.

13



當時は文藝氏の所有となつてゐるが、  
家

表河の蔵の寺院に移つた。これに随ひの書生や寄  
No. 14

寓の友人が殖えり何れか結果である。

其後(東京)八番地に移り、更に同古五番

地の移り廿二年の初夏に、  
住所の隣地へ移つて、第二期著述生活に入つ

た。の發刊以前

小説神髓は前に述べた通り、これと一一定の基

礎書も多く寄せて未細式に導上げた。藝術論はあ

つた。もう一つも、  
私がおれと讀んだの

氏美術といふものがあつたが、  
No. 15

相馬屋製

は書生氣質の三四号あつてからで、長原孝右郎君  
No. 15

から借覽しそのが最功であつた。私か神髓發

刊以前に觸目してゐた邦文の物では、外山井上

矢田部諸氏の新體詩海、  
No. 15

華文とか、エノ口井の美術論の譯とか、國倉實三

氏の書は美術なりをいふ論、  
No. 15

に思ふ。國君氏の出せる左何れか雑誌(書は美

術に及ぶ)と、拙い論文を投書して没書にされた

ことと、微かに記してゐる。

小説神髓は馬琴の餘りな備へた勸導主義

相馬屋製



論文、  
記事、  
文、  
形容、  
文、  
文、  
文、  
文、

と非難するの甚根李義とて書いたものには違ひ  
たゞが、如時以來深く深し曲亭意味は實  
際にはあれ決してあけ切るところであつた。  
これが歴然と作者の文致にも文致にも  
就中、文致の女まは、徹頭徹尾、  
拙劣な馬琴調崩れであつた。  
頃、私とては、他に持合せ  
たのうちはあるが、曲亭柳作の教頭人とは  
頗る滑稽な矛盾であつた。慶女作と書生氣質  
と命題したのほ、無痛、自天、其蹟に感興を賞

△な文體

えは、サてゐたうで、はあつたが、何分にも先入の  
文化文脈が幅つてゐて、元禄句調を取入れる餘  
地がなく、自墳が加はらつて、  
だ、しやだ、と思ひながら、  
あれから、十何年の後、  
と拙つた、  
非と自識、  
こんな、  
たうな、  
書生氣質は、  
要するに、  
なまけ學生のい

相馬屋製



くまのこ

ちゅうりゅう書きこむるきなる。明治三十四年の寄附金  
生活中に時々懸念記なきと西村の小説に  
書き綴つておるが、いはい、これと併立して小説に  
ちやうどそのた。胎生期の主な作のやうに言はれ  
衝動に堪へない。小説精神の主張とあの人意  
とが矛盾するものも、つまり、作の方が多。先まに出来  
たからであらう。二つには、私の勤王主義の攻撃は  
七分徹底したものであつたからである。其證據  
は神髓の論旨中にも暗示されてゐる。妹の筆の

は下意にも見えてゐる。仁義忠孝の象徴のやまも、  
小説教其物のやまを注意はいけなく、くらおの意に  
仿皇たるおの論旨なるである。書生氣質も、小説精神も、此點の  
無價値の著述あるが、時代が幼稚であつた  
為に、あつたの及響があつて、明治十八年の七月  
後には、~~期~~幾多の推あを纏た。長原孝  
弟君の書生氣質の抽像を畫してやらうとして、  
突如來訪されたのが七月であり、後の緑雨の齋  
を賢氏が小説家としてのやうなものを組織して

相馬屋製



月二度のあつた

と、その事、其の月であり、長谷川二葉氏が

初め、本町の十九年の、竹の

故郷、菅原正直、に、今、に、

私、は、他家を訪問する、来訪者

は、どんな無縁の人をも、歓迎して、

あ、向いて、親友二人の、

め、稀れであつた、面識のない人を訪ねるな

いは、後に、早稲田文学部と創立、

稲田文部、旅行、上、或人を

其時、

正直、

人に、

に、

相馬屋製

相馬屋製

講師として、聊、小禮義、も、

む、得、あ、出、掛、けた、ぐらゐ、の、もの、だ、

と、い、う、あ、る、解、が、な、い、あ、つ、た、あ、つ、た、あ、つ、た、

校、と、進、文、学、部、の、外、に、な、る、四、人、社、を、も、

学、会、の、女、子、部、を、も、教、えて、お、り、あ、つ、た、あ、つ、た、

嶺、南、の、女、子、が、前、編、で、書、か、れ、た、の、で、も、ほ、う、想、象、さ、

れ、る、如、く、直、方、な、あ、つ、た、の、面、識、の、無、い、人、が、文、を、

来、訪、し、た、平、解、と、い、う、は、早、稲、田、の、外、

無、い、あ、つ、た、平、解、は、早、稲、田、の、勤、務、と、其、下、見、に、専、し、

相馬屋製











夫を「お前」と呼びやうに言ふべきだと主張するが、  
 現に「お前」と書いた前に例の父と子の筆入りに  
 かゝる其式で語らうと書かされたことがある。こ  
 りの「お前」が大波の日野商店の世話をしたことがあつた。其前  
 金輝殿と二葉亭に渡したことがあつた。その書いたものは、日記  
 ねは十九年四月四日の記事だ。あの原稿を日野  
 商店は「お前」が知らん。無償世にあつた。埋め  
 てしまふ。残稿を催促する事だ。第一稿と二稿に  
 要するに、所謂胎生期は私に取つては、餘り憶  
 ひあつた。お前、不愉快な時代だ。

て、漸く「お前」に成りかゝり、二葉亭との文壇によ  
 つて、お前反自省を促され、更に「お前」に成  
 つたにつれて、お前が過生涯の無自覚や不見識を  
 軽薄や虚栄や自信が堪らなく、いやになつて、怒  
 り筆を執る氣がなかつた。お前、生活上、全く絶筆す  
 るわけにもゆかず、拮据した中、お前を懐念してゐた時代  
 だ。大久保への移住は私に取つては、一生中の大事な  
 事だ。

廿三の  
 相馬屋製

二葉亭の身上に就いては、私自身の事には、お前  
 こそ、廿一二年頃の文壇に就いては、お前



詠すまき事か随分あがが、病後の為か、  
唄に申さるゝて、根がら氣力が無く、  
りから、今はこれぢや、お魚を喰らうておく。しう  
水他日を期して此條詠を詠みませう。

(十四年六月十二日)

相馬屋製



